敵艦に近づけるかということです。
材料不足で特攻艇の完成をみず遂に海上特攻隊のト号作戦は為すことのないまま敗戦を迎えたのです。幻のト号作戦でした。
千葉や茨城や北海道に構築した特攻艇を秘匿する洞穴堀徒労でした。

シベリア送り員数不足
北鮮で戦後の召集

宮崎県　金丸元美

昭和十四年徴集兵として同年十二月、朝鮮大邱の第二十四部隊に入隊しました。
その後一期の検閲を経て一等兵に進級、原隊勤務を続け、翌年には上等兵に進級しました。その間初年兵教育等種々の勤務に携わりました。三年間の兵役を終えて昭和十七年十二月兵役を解除され除隊しました。その後入営前の勤務先である朝鮮咸鏡北道敬光郡アゴチの旭化成石炭液化工場、航空燃料製造工場に再就職しました。
昭和二十年八月八日、ソ連軍が一方的に日ソ不可侵条約を破り朝鮮にまで侵攻を開始しました。旭化成の社員の家族は十月十五日急遽新京に避難させることとなり、四十世帯の家族を移動のため誘導班を編成して新京まで輸送しました。ところが十一月十五日、ソ連軍の命令により人員不足を補充するためか、日本政府を動かし在新京周辺の日本人に対し召集令状を発行しました。私達は南領高等女学校で兵役検査を受けましたが何の事はない、ここに一週間居て、後はシベリアに連行され強制労働に従事させられるのであるが、その時はその後の悲惨な死の労働など神ならぬ身の知るよしもなかったのです。
新京で貨車に詰め込まれ、不安と楽観論の入り混じった談話の中、夜の十時頃ソ満国境を通過したことが分かったのです。翌朝四時、列車はある駅に入り停車しました。一週間はこの貨車の中での生活で、排便以外は下車を許されなかったのです。その間の食事は

一人一日握り飯一個、水は無し、握り飯一個を一日何回かに分けて貴重品のようにして食べました。

再出発して着いた所はイルクーツクでありました。それより下車して徒歩で四キロの所が収容所でありました。そこには粗末な部屋に四段の棚があり、それが収容者の寝床で生活の場でもあるのです。部屋は満杯状態であったのです。

翌朝、大隊長訓示があり「本部隊は混成部隊であり将校四百七十名、一般人四百五十名、下士官兵七百名を以て編成している。特に申し上げたいことは日本は敗戦したのであるから軍隊ではない。今後ソ連からいろいろと仕事が割り当てられるであろうから全員平等に協力して作業をして貰いたい。全員が無事祖国日本に帰れるまで助け合って頑張って欲しい。特に食糧については今までのような訳にはいかない。従ってその辺の事情を充分考慮し、精気を養うように心掛けて欲しい」と。

さて朝食は飯盒二杯が一日二人分、大豆が一日一人三粒、支給されました。一般作業は炭鉱の石炭堀りと運搬に従事しました。四十名一組で三交代、材木関係作業は三十名単位一組で作業に、その他に特に要請があった場合その都度使役として出るのです。

私は第八ラーゲルに使役として応援に行ったことがありますが、ここは軍隊組織のままを断続して厳しい作業に従事していました。階級制度も存続していたようであります。過酷な労働と栄養失調のために全員が死亡しました。私の使役の役目はその死骸を埋めるための穴堀り作業でありました。

私のラーゲルでも大豆三粒の食事が六か月続きました。みんな痩せ細って骸骨が歩いているようで、己をしみじみと眺め涙のにじみ出るのを抑えることができなかったものです。

その第八ラーゲルの別室には、八畳位の部屋に裸にした死骸が天井まで届く位高く積み重ねられて部屋は満杯の状態でありました。隣の部屋では病人が充満していてウメキ声とのたうち廻る壮絶な姿に目をそむけざるを得ませんでした。

六か月後には小麦粉の粥が支給されるようになりま

した。私は風呂場のボイラーの釜焚きに廻され、後半は毎日毎日その材木運搬作業に従事しました。その後また炭鉱の石炭堀りに配置され、帰るまで暗い危険な穴蔵生活が続きました。

「ダモイだぞ集まれ」と言われ、集まったのがわずか四十七名で、後で分かったのですが運搬船の乗船人員の余裕があり運良く私はそこに補充されることになったのです。ナホトカに集結したのが昭和二十二年十月末でした。

帰還船は舞鶴港に入港、夢にみた祖国の土を踏むことができたのですが、異郷の地で悲惨な死を遂げた人々のことを想えば万感胸に迫るものがあります。